



Universiteit
Leiden
The Netherlands

"Column: Taisei-kyō kenkyū no susume" 〔大成経〕 研究のすゝめ

Boot, W.J.; Satoru, K.; Satoshdi, S.

Citation

Boot, W. J. (2023). "Column: Taisei-kyō kenkyū no susume" 〔大成経〕 研究のすゝめ. In K. Satoru & S. Satoshdi (Eds.), *Ajia Yūgaku* (pp. 140-144). Tokyo: Benseisha. Retrieved from <https://hdl.handle.net/1887/4175595>

Version: Accepted Manuscript

License: [Licensed under Article 25fa Copyright Act/Law \(Amendment Taverne\)](#)

Downloaded from: <https://hdl.handle.net/1887/4175595>

Note: To cite this publication please use the final published version (if applicable).

『大成経』研究のすゝめ

W・J・ボート

一、『大成経』と『旧事紀』

『大成経』（先代旧事本紀大成経、十七世紀中頃成立）は、神代から聖徳太子の時代までの日本の歴史を語る、漢文体で書かれた七十二巻の厚い本だ。全体は正編三十八巻（十四本紀）と、雑部（副部）三十四巻（十四本紀）から成る。正編はさらに、「神代紀」（十六巻・十本紀）と「皇代紀」（二十二巻・四本紀）に分けられる。「雑部」は名前の通り、内容が様々だ。用語も構成も中国の正史の「紀伝体」を思わせるもので、日本の史書の中では珍しい。

「氣」を否定し、我流の神話を作成する意図は明らかだが、どう理解すべきだろう。回答するためには、まず『大成経』成立時の状況を見る必要がある。『大成経』は自ら、聖徳太子（五七四～六二三）の作と称するものの、事実ではない。古代のテキストではなく、十七世紀の偽作で、一六七〇年から一六七九年の間に部分的に刊行され、初めて世に現れたのである。どんな意図で作成されたかと言うと、基本的に日本の神道の真実性や優越性を、中国由来の儒教と仏教に対して主張することだった。ただし名目上は聖徳太子の作なので、その後の出来事に言及することは許されていなかった。古代の儒学に言及することは可能だが、後代に成立した宋学（宋子学など）を扱うことは出来ない。だから、『旧事紀』や『日本書紀』に見られるような、古代中国の宇宙論との違いに言及するものの、本当の狙いは近世の日本で広まりつつあった宋学だった。結果としてそれは間接的に行われて、

「本紀」の用語と神々の名前は『旧事紀』（先代旧事本紀、九世紀頃成立）に類似するが、『旧事紀』の写しではない。『大成経』巻一～三はそれぞれ「神代本紀」「先天本紀」「陰陽本紀」と題され、一方『旧事紀』の第一巻は「神代本紀」と「陰陽本紀」から成る。両書は似ているが、同じではない。

『大成経』と『旧事紀』において、世界で最初に化生する神は「天譲日天狭霧國禪月國狹霧尊」（『旧事紀』）または「天祖天譲日天先霧地讓月地先霧皇尊」（『大成経』）と呼ばれている。大同小異だが、『旧事紀』では神の化生の前

宋学そのものを取り上げることはできなかった。

なお、この「隠れた」宋学批判の中では、「神」の観念に対する批判が中心的な役割を演じている。つまり、中国では神を死んだ人の気であるとするのに対し、日本では神が生きており、個性を有し実存する存在である、ということが度々強調される。良い例として、朝鮮人の儒者たる王仁と菟道郎子太子との討論が挙げられる（第四十四巻「経教本紀下下」）。

二、乏しい研究蓄積

出版歴や残存部数のような書誌学的証拠によって見れば、『大成経』は人気があった。一六七〇～一六七九年の間に、何回か部分的に印刷された。一六七〇年の初版は、所謂「鶴鶴傳」である。三十一巻の木活字版で、「帝皇本紀」で終わる。一回目の印刷は一六七九年のもので、今度は整版本である。「聖皇本紀」も含み、三十八巻ならびに目録と序文

に「元氣渾沌、天地未割。猶雞卵子、溟涬含芽」というふうには、宇宙の起源を先に語る。『大成経』にはその記述は無く、正編冒頭の「神代本紀」は、いきなり「無生始天神」の神の説明から始まる。その神名は上述のとおりで、「天祖」が接頭されている。この「無生始天神」（別に「天祖天神尊」とも）の教行の描写は「虚莫ノ極ニ座シ、妙定ノニ立チ、先ツ物、有ルコト無ク、之ヲ主ラズト云フ無シ」という文章で終わる。

三、宋学批判

『大成経』の、神以前に存在した「元

（各一巻）を数える。序文の刊記に依ると、延宝七年（一六七九）に印刷され、本屋は「江戸室町三丁目戸島惣兵衛」である。残りの三十九巻と七十二巻は写本でしか伝わっていない。この外、一六七〇年から一六七九年までに「憲法本紀」（第七十巻）、「宗徳経」（第三十九巻）、「神教経」（第四十巻）、その後は「礼綱本紀」（第五十七～六十巻）が個別に印刷された。こうした部分的な刊行は明治初期まで続いた。殊に人気があったのは、「未然本紀」（第六十九巻）と「憲法本紀」であった。

「正編」が全体として再版されなかったのは、一六八一年に『大成経』が幕府に禁じられたからだ。伊勢神宮の禰宜が、『大成経』によると天照大神が天下りした先は内宮ではなく伊雑宮だと書いてあることに気づき、大いに怒った。朝廷経由に幕府に訴えたので、幕府は止むを得ず同年に書付を出して、『大成経』を焚書の対象としたという。その二年後には、版木を燃やすべきだという命令も出

プロフィールの「執筆者」の項目をお願いします。
お名前読み・ひらがな——現職（兼職なども）、専門、著書・論文（代表的なもの一二点ほど）

したらしい。

以上で分かるように、『大成経』は色々な角度から研究することができる。近世中期の儒仏神の論争の中で、その神道説に注目するという近世思想史的関心からのアプローチが可能である。一方、諸本を比較して原本を復元しようとする文献学的アプローチも、古代・中世の史書や神道書と比較し変遷を辿る思想展開に注目する研究もあり得るだろう。あるいは、その後の日本の思想と文学に与えた影響を対象とする受容史の研究も面白い主題である。残念ながら、これらはまだ殆ど着手されていない。

四、作者をめぐる

現代の『大成経』研究は、誰が『大成経』を作ったか、という関心に集中しがちであるが、諸説はあっても確証はない。理由は以上の説明からも分かるだろう。第一の理由は、『大成経』が名目上、聖徳太子の作であったこと、第二の理由

は禁書になっていたことである。本当に作った人たちが世に出て、『実』は『大成経』は私たちが作った」と告白(自慢?)することは期待できなかった。それでも、頻繁に浮かんてくる名前は京極内蔵助、忌部丹斎、長(永)野采女(二六一六―一六八七)、潮音道海(二六二八―一六九五)の四名である。『大成経』への関与が確実なのは黄檗僧の潮音道海だけだが、彼は執筆に参加したのではなく、一六七九年の刊行に寄与したまでのことだった。彼は『大成経』が禁書になった後も、著作に『大成経』を引用したりし、その一部を敢えて刊行させた^③。どうも本当に、『大成経』は聖徳太子の著作と信じていたようだ。

他の三人は、長野采女だけは伝記があり、生年月日が分かる。『長野采女在原吉門先生行業記』を執筆したのは弟子の仙嶺で、後年、采女に師事して一緒に行動したようだ。ただし、伝記に書いてあることは何一つ他の資料から裏付けられ

ないし、采女の著書とされるものは一つもない。一方、潮音が、自分が『大成経』を知るようになった経緯を語る随筆の一章(要伝神道^④)では、長野采女の重要な役割を強調する。しかし、長野の伝記には、相当する記事は存在しない。

『鵜飼傳』の木活字版を印刷させたのは京極内蔵助となっているが、同書の跋を見れば、その末尾の名前は「八雲軒住持 央命／源朝臣能門」だ。系図も付いているが、途中から通例の京極家の系図とは合わなくなるので、信憑性が薄い。京極の名でも源能門の名でも、他の資料からは同一人物らしい者は浮かんでこない。

残った忌部丹斎も詳細が分からない。別名は出口市正で、伊雑宮の神主家の出であつて、伊雑宮の旧領返還を果たすため、寛永の頃に江戸に出て徳川家光に訴えるため『大成経』の写本を献上したが、家光が林羅山に意見を求め、羅山が偽作と判定したため、その『大成経』を返された。丹斎は怒りの余り、同書を燃やし

て自殺した、という^⑤。山鹿素行に「根本宗元」神道と忌部神道の口訣を「残らず」伝授した、広田坦斎と同一人物という説もあるが^⑥、これも憶測の領域を出ない。

五、深まる謎

江戸時代には誰が書いたかより、いつ、どの写本が公となったか、ということが問題にされた。『大成経』の推古天皇の序に依れば、『大成経』の三つのコピーが五十鈴宮と大三輪宮と四天王寺の三ヶ所に預けられた、という^⑦。一方、依田貞鎮(編無為^⑧、一六八一―一七六四)は鵜飼本と高野本と長野本の三本を区別し、「長野家の言に伝えに依つて」潮音が印刷させたのは高野本だった、と記す。鵜飼本(三十巻)は京極内蔵助という者が木活字版で出し、長野本は元々伊雑宮(五十鈴宮)の所有物で長野家に伝わり、潮音は采女に灌伝を受けた後にしか手に入れられず、その後に潮音の門人某が印

刷した、ともいう^⑨。これらも確実な裏付けはない。

書き連ねれば連ねるほど、『大成経』は謎が多いテキストである。是非とも多くの方が研究に加わるよう、お勧めしたい。

注

- (1) 木活字版は九部残存する。宮真齋臣編、『鵜飼伝先代旧事本紀大成経』(聚文社、一九八一年)という現代版もある。同書は翻刻だけでなく、木活字版の写真も各巻の最後に付けてあるので大いに参考になる。
- (2) 簡単にアクセスできるものとして、内閣文庫所蔵本がある(版本と写本の両方を含む)。五九冊の一部で、請求番号は一四三―四五三である。なお、小笠原春夫が全巻を翻刻して一九九九年に四冊本として『統神道体系：論説編』に表わした。ただし小笠原は、内閣文庫本とは違ひ、全巻写本のテキスト(武田本)を底本とした。
- (3) 『扶桑三遺権輿録』(二巻、一冊)は元禄七年日付の自序はあるが、本屋の刊記はない。『大成経』からの長い引用と

潮音の「評」からなる。潮音の『扶桑護仏神論』(写本、一冊)は自序の年記が貞享四年なので禁書後の著書だが、これも『大成経』の引用が多くて長い。

(4) 『指月夜話』六(写本。佐藤俊晃「潮音道海の神国意識——先代旧事本紀大成経」との出会前後」(『印度学仏教学研究』五〇―二、二〇〇二年)七〇―九一七―三頁参照。

(5) 『扶桑護仏神論』巻一第二四丁裏―二五丁表、ならびに三田村鳶魚『大成経学の伝統』(『大日』二三九、一九四一年)二六―三二頁を参照。

(6) 坦斎は『配所残筆』に名が見える。『山鹿素行』(『日本思想体系三二』(岩波書店、一九七〇年)三二―三〇頁を参照。

(7) 『大成経』(版本)「序」一六丁裏―一七丁表を参照。

(8) 依田貞鎮は神道と仏教を学び、江戸谷中で塾を開いて、神道を教える。特に『大成経』を詳しく研究して、注釈等も少なからず著した。

(9) 『大成経来由』(内閣文庫所蔵写本、請求記号一四三―四八六)のデジタルコピーの第三六コマを参照。河野省三「旧事大成経に関する研究」(非売品、一九五二年)一〇九―一三〇頁に他の写本

(『大成経来由記』)を翻刻したテキストがある。

(10) 「長野家ノ説ニ、高野本ハ、潮音是ヲ得テ印行ス」という文章は内閣文庫本ではなく、注9河野前掲書、一二八頁で引用される写本に基づく。

(11) 注9河野前掲書、一七、一二八頁を参照。